

創造そして 新たなる進化への旅立ち



学校法人神奈川歯科大学理事長
鹿島 勇

新年明けまして おめでとうございます

昨年は、“再生そして新たなる創造への旅立ち”の標題で新年を迎えた。再生と言う名のもと、復旧と復興の同時進行に伴って必ず通過しなければならない混沌からの脱却にはひとまず成功したといえよう。2012 年は“生命は絶えず予知できない新しいものを生み、飛躍し、創造的である”とするベルクソン哲学から導いた。大学全体が一つの生命体と化し、自ら分裂と破壊を繰り返しながら、将来ビジョンに向かって創造的進化を遂げん事を願うものである。

総合力による V 字回復

本学の将来ビジョンは、財政、評価、環境そしてグローバル化をキーワードとする健康長寿社会を支えるプロフェッショナル組織である。この将来ビジョン実現のためのエネルギー源とも言える財政は、文部科学省より指定された経営判断指標に基づいて評価される。学校法人の経営

状態は、健全度の高い順に A1、A2、B0、B1、B2、B3、B4 の 7 段階の総合指標で定量的に示される。

本学は平成 21 年度まで B2 (赤信号と黄色信号の間) であったが、平成 23 年度をもって B1 (黄色信号) をスキップし、B0 (青信号と黄色信号の間) への格上げが確実になった。

わずか 1 年足らずでの V 字回復は、教職員個々の力を結集した総合力の賜物に他ならない。まずは、この B0 への格上げが、最高位である A 評価獲得のための勢いと時間的猶予をもたらすことになる。

A 評価を確保し、それを持続することによって初めて法人の永続性が担保される。今年度がその最終章の始まりとなるよう、さらなる改革を実行していかなければならない。

20 年後をデザインする

一方、もう一つのキーワードであるグローバル化とは“国を超えて地球規模で交流や通商が拡大すること”と定義される。このグローバル化がもたらす社会や制度の変革は教育分野においても例外ではない。

本学は、ボーダレスという時代の潮流を宿命として受け止め、昨年度より海外留学生の獲得に積極的に乗り出した。

文部科学省によると、日本の 18 歳人口は 2013 年を境に、そ

の 5 年後に 18 万人、18 年後に 32 万人減少することが推測されている。注目すべきは、18 年後に四年制大学への進学者が 12 万人減少するというシミュレーションの結果である。

しかしながら、本学が海外留学生確保に踏み切った主たる理由は、この推測結果への対応策ではない。その構想は、海を越えたグローバル社会における本学の果たすべき役割を考えた時、日本と言う“閉鎖的しぼり”から脱却し、アジア全域の歯科医療を担う国際医療教育機関としての世界観に端を発している。

20 年後の本学を戦略的にデザインするこの構想は、100 年の歴史を有する学校法人神奈川歯科大学としての新たなるアイデンティティーの創発となり、ひいては日本の国益にも繋がっていく事を確信している。

新しい形のグローバル化

どのような将来構想であるのか定かではないが、日本の某私立医科大学が、“日本の医学部に入りませんか”と題し、韓国において学部学生の募集を開始した。多くの受験生を集め、学生の充足率をも十分に満たしうる現状に甘えることのない、その先見性と勇氣ある決断に対し、改めて敬意を表するものである。

幸いにも、本学はその一歩先を進み、韓国の名門として知られる高麗大学との間に単位互換提携協定を結ぶことができた。高麗大学で、神奈川歯科大学 1 年生としての単位と日本語能力を修得し、2 年進級時に本学に合流

する方式である。

日本では初めての試みであることから、文部科学省はもとより、他大学からも注目されている。今年度はさらに海を越え、台湾、シンガポールルートの開拓に着手し、歯科衛生・看護を含めた法人全体の戦略的グローバル化を目指すつもりである。

自立再生、最終年度へ

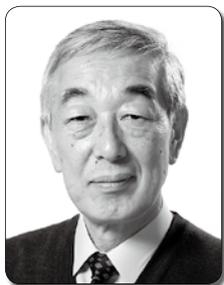
平成 22 年度を改革元年としてスタートした本学自力再生への 3 年計画は、最終年度を迎えることになる。実情に即した給与制度の改定、教育を主とした教員組織改革、不採算部門の再編など、いよいよ核心を衝く改革へと迫っていくことになるであろう。

改革には、従来の仕事のやり方、慣習との決別や雇用調整など痛みを伴う施策も想定される。当然そこには、心理的要因が複雑に絡み合ってくることから、教職員の意識改革なくして成功はありえない。

1999 年度のベストセラーになったスペンサー・ジョンソンの“チーズはどこへ消えた?”というビジネス本がある。そこには、時代や環境の変化を受け入れない、あるいは受け入れたくないという人々に対するメッセージが、2 匹のネズミと 2 人の小人を物語のモデルとして巧みに述べられている。結論は“自分自身が変わらなければ事態は好転しない”ということである。

学校法人神奈川歯科大学の新たなる進化への旅立ちをご支援いただきたい。

平成 24 年の新年を迎えて 教育改革元年



神奈川歯科大学
湘南短期大学
学長 佐藤貞雄

皆様、新年明けましておめでとうございます。昨年（平成 23 年）は、3 月の東北大地震および福島第 2 原発事故などの影響で大変な 1 年間でした。新しい年平成 24 年は大学にとりましても皆様にとりましても夢のある 1 年になりますよう心から祈念する次第であります。

平成 22 年度から始まった本学の健全化は、22 - 23 年度の短期改革期を経ていよいよ中長期の改革が本格的に始動することになります。

健全化の本丸は教育改革であります。平成 22 年度の本学の消費収支黒字化は、将来の方向性に光を与えたことは確かです。しかし、本学の将来を占う上で、教育改革なしに

は本当の意味での健全化が達成したとは言えません。

教育力について

本学の教育改革の最大の課題は教育力の強化です。さらにこれを進める上で考えねばならないことの一つに教員組織の問題があります。分野毎に選考される教員は、主として研究業績を中心に選考され、選考された教員は確かに専門分野における特別の知識と見識を持っているかも知れませんが、必ずしもその分野の教育に卓越しているとは限りません。かえって、あまりにも専門的過ぎて学生はついていけないということもあり、結果として学生が学習していないという状況を生み出す危険性を孕んでいます。

本学の教育力を強化するためには、教育に能力と情熱を持った教員を集め、教育に特化した教育専門組織（総合教育センター、仮称）を構築する必要があります。総合教育センターは、医療人を育てるために必要なすべての課程を開発、実施する組織で、なか

でもカリキュラム開発はその中心をなすものです。

「人材育成」の多展開

カリキュラム開発の要は、本学で教育の上流過程である臨床医や医療人の育成段階までを教育しきることができる分野はいったい何なのかをはっきりさせることです。このことは、やるべきことを細分化するというような還元主義ではなく、たとえば歯科医療概論といった科目に集約した医療に関わる総合科目を中心に構築するということです。これまで教育してきた内容を項目ごとに見直し、枝葉をそぎ落とし、医療教育の幹の部分に縦系列に配置し、学生が自主的参加と深い経験によって着実に学んでいるという教育の仕組みを生み出すことが必要であります。

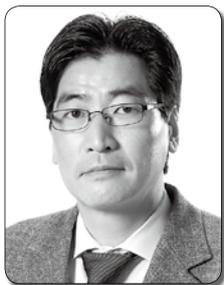
学生時代に着実に上流過程まで辿りついた学生は大概の能力を身につけます。変化の時代にこそ、深さあるいは高さを教えることが最も重要であり、「あれもこれも」の出店主義的な基礎教育では、結局変化に対応できず、自分のやるべきことを放棄してしまう学生を育てることになり

かねません。つまり還元主義的な基礎教育主義は基礎の教育さえ出来ていないということになりかねません。本来の「基礎」といえる教育は専門職の縦系列全体を体験させることそのものに他ならないと考えるべきでしょう。

医療人を育てるカリキュラムは、人材育成という科目を多展開したものであるべきであり、全ての科目が緊密に横の連携と縦の連携を持っているように配置されていなければなりません。極端に言えば全科目で一科目というように構成される必要があります。さらにこのような教育課程で、医療分野で自立した専門職業人になるためには、どんな知識や技術を体得しなければならないのか（コンピテンシー）を示すものでなくてはなりません。このことは歯科医師を育てる場合も、歯科衛生士あるいは看護師を育てる場合も同じであります。

本学が医療人を養成する高度な専門組織を構築し、医療人養成教育を根本から見直すことによって初めて真の健全化が前進するのです。本年を教育改革元年とすべく、教員が一体となって改革に取り組むべきと考えます。

新病院の設立に向けて



神奈川歯科大学附属病院
病院長 小林 優

新年、明けまして おめでとうございます

病院長に就任して、早、1 年 8 か月が経ちました。昨年度は、目標としていた教育研究のキャッシュフローに加えて、僅かですが帰属収支でも黒字化を達成することができました。就任当初は「3 年間で 2 度の黒字化」というあまりにも重い課

題にたじろぎましたが、何とか第 1 関門を突破したと少し安堵しています。また、悲願であった大学基準協会の認証も受けることができ、大学再建の足取りは少しずつですが、しかし、確実に進んでいると実感しています。これも一重に皆様方のご尽力の賜物と心より感謝申し上げます。

さて附属病院とは言えば、22 年度収支（対前年度比）は、医療収入が約 11.4 億円（+1.1

億円）、人件費（教員を除く）が 9.2 億円（+0.4 億円）、業務委託費が 2.0 億円（-0.7 億円）で、残念ながら黒字化には至らなかったものの、赤字額は 21 年度の 6.0 億円から 2.3 億円へと大幅に縮小しました。さらに、23 年度上半期は 22 年度を上回るペースで医療収入が伸びており、改めて病院スタッフの頑張りを誇りに思う次第です。

少子化が急激に進む今、我々は、歯学部間の生存競争と同

時に、医学部との間でも入学生の獲得競争に晒されています。医科大学の収入の8割は付属病院が生み出す医療収入です。学納金への依存度は、本学の7割に対して2割にも落ちません。医学部は、こうした強みを活かして軒並み授業料を引き下げ、良質な学生の確保に努めています。一方歯学部でも、一部の大学では授業料の大幅値下げを断行しており、既に医学部も歯学部も激しい価格競争の時代に入ったと言っても過言ではありません。こうした中で我々が生き残る道は、教育力の強化によって受験生の信頼を獲得するとともに、少しずつ学納金に依存しない体質へと脱却して行くこと以外にありません。そのためには、附属病院な

らびに横浜クリニックの経営合理化と収益性の向上が、どうしても欠かすことのできない条件なのです。

我々附属病院が当初の目標としていた「平成24年度の収支均衡」にはもう一步のところまで来ています。しかしさらに進んで、病院を永続的に黒字化するためには、より一層の合理化が必要なことは言うまでもありません。その上で、我々の商品である歯科医療そのものの質的向上をもたらす創造的な組織改革も必要だと感じています。

改革はまだ端緒についたばかりですが、本学の生き残りを賭けた「平成27年度の新病院設立」に向かって私も必死で頑張りますので、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

経営改善5カ年計画の最終年度を迎えて



法人事務局長
峯村明彦

新年明けましておめでとうございます。

いよいよ経営改善5カ年計画の最終年度を迎える年になりました。ご承知のように平成20年度から文部科学省私学部参事官付私学経営支援企画室及び日本私立学校振興・共済事業団の指導のもと経営改善に努めて参りました。

結果、平成22年度は、帰属収支差額が僅かではありますが黒字化しました。ひとえに、

教職員各位の丸となった“協働と支援”の賜と感謝しております。

学外を見れば、240万人いた18歳人口がここ数年約120万人に減少し、その内私立歯科大学へ入学した学生は約1500人ととどまります。規制緩和による大学の二極化、入学定員割れ、経済不況による学費の滞納など高等教育を取り巻く環境は、益々厳しいものになるばかりです。

常に社会やステークホルダの要請を把握し、教職員が同じ目標に向かって改革を推し進めるための組織改革が平成24年以降の課題となることでしょう。

学内を見れば経営改善を推し進める中で、多くの問題点が浮き彫りになってきました。一つには、予算主義を取らずにきたため赤字体質、赤字を“是と

「笑門来福」一辰年にかける



神奈川歯科大学附属
横浜研修センター長
吉田和市

東日本大震災の復興と、被災された方が一日も早く「笑門来福」の言葉を実感できますよう心から願っております。未曾有の複合的大災害である東日本大震災の傷は深く、我々は、窮地に立っても決して諦めない姿勢を貫くことが大事であることを新しい年を迎えあらためて強く感じます。

さて、横浜研修センターは、経営の効率化、健全化、収支のバランスを目標とし教職員が血の滲むような努力をまいりました。その結果、緻密な工夫で支出を抑え、一点一点の小さな積み重ねが大きな収益に結びつきました。これも一重に教職員の皆様や多方面にわたり、ご助力をいただきました方のお陰と深く感謝する次第です。この紙面を

する風土”から脱却できていません。とりわけ固定費である人件費、管理費、実習・研究費の見直しが上げられます。

また、組織の簡素化の面では、人事制度改革、歯科大・短大の教学の統合、図書館の一本化、など費用対効果の面を考えても今後着手していかなければならない課題であると認識しております。また、有能な歯科医師、看護師、歯科衛生士を排出するためには、質の高い教育、それを実行する教育職員、それを支える事務職員の“職員

お借りして厚く御礼申し上げます。

医科部門の改革に関してはまだ課題が残されておりますが、診療体系の見直しに伴う再構築を進め医療システムの充実・強化を図りたいと思います。昨年に引き続きオベラ、病棟の稼働率をさらに向上させ、センターに特化した医科と連携した高度医療の提供に努力したいと考えております。

横浜研修センターは本年「辰年」の7月15日で開設10周年を迎え、記念式典・祝賀会の開催を計画しております。

辰は動物にあてはめると竜であり想像上の動物ではありますが、盛運の勢いが強く昔からおめでたい兆しとされております。センターも上昇気運に乗り、更に発展するためにも皆様方のお力添えを賜りますようよろしくお願いいたします。

また私ごとではありますが、辰年生まれの私も竜にあやかり飛躍の一步を力強く踏み出したいと思っております。

新しい年が皆様方にとって素晴らしいものでありますように、お祈り申し上げます。

力”の向上と役割定義を明確にし、あらゆる面でサポートする体制の構築が望まれます。

平成24年度は、法人事務組織としては、経営改善をさらに推し進めるだけでなく、健全化プロジェクトが提唱している“健康長寿社会を支えるプロフェッショナル組織”の中でも「貢献が報われ誇り有る労働環境」「未来につながる財政基盤」の構築に専念する年にして行きたいと思っております。教職員一同の更なるご協力とご支援をお願い致します。

年頭のご挨拶



神奈川歯科大学同窓会会長
大館 満

新しい年を迎えられたことを心から感謝いたしております。

しかし、昨年は東日本大震災、原発事故、そして観測史上最大の豪雨、続いて大きな台風と全国規模の災害が襲ってまいりました。世界的にもタイの洪水は日本企業に多大の損失を与え国内の災害から立ち上がろうとする日本企業、そして日本国民に追い打ちをかけております。地球の歴史と我々人間の在りようをもう一度真摯に問いかけるときが来ていると思っております。

同窓に目を向けてみれば昨年の東日本大震災で同窓も多数

被災しており、歯科医療は壊滅的被害を受けました。早々に支援金を募り、事業基金よりの拠出と合わせ、被災の大きかった個人と各支部あてに分けて送金し、第一次支援を実施しました。

また、歯科医療現場の復興のため大学、KDCSAS より多くのご支援を賜りましたことをこの場をお借りして御礼申し上げます。

7月24日に地元の了解を得られましたので学長、岩手県支部長と共に現地視察にまいりました。被災地のほんの一部ですが状況を実際に自分の目で、肌で感じることができました。医療崩壊から復興するのは並大抵のことではないと実感いたしました。これからも継続的支援を必要としております、ご協力をお願いいたします。

年は改まりましたが、被災した方も多く、昨年より本年はより良い年となることを心より祈念して年頭のご挨拶とさせていただきます。

同窓会と「絆」とは



湘南短期大学同窓会長
名取すみ子

新年あけましておめでとうございます。

東日本大震災で被災された皆様にお見舞い申し上げますと共に、被災地の一日も早い復興、復旧と皆様方のご健康をお祈り申し上げます。

皆様には日ごろより湘南短期大学同窓会に対し一方ならぬご理解とご協力等を賜り、厚くお礼申しあげますと同時に、本年度もどうぞよろしくお願いいたします。

昨年は同窓会として学生確保のために高校訪問のお手伝

いをさせていただきました。現状はとても厳しいものであり、大学と高校との連携がいかに重要で、同窓生との絆の大切さを身をもって感じることができました。

同窓会は学校側への最大の理解者であり一番の応援団だと自負しております。

母校のさらなる発展と繁栄を、皆様方にとりましてもこの新しい年がより佳き年でありませう心から祈念いたしまして私からの新年のご挨拶とさせていただきます。

学校法人神奈川歯科大学 100年を振り返る (開学100周年記念連載)

第4回(最終回) 歴史に秘められた真実④ 戦中戦後、廃校から復興

弓削先生の専門は口腔細菌学として知られていますが、当時は補綴を担当されていたとの事です。

昭和24年卒業の後藤幹子先生より、戦後の学内の様子について、「他校が電気エンジンに置き換えられ近代化されるなか、本学では相変わらず足踏みエンジンでした(写真15)。また、校舎の一部が壊れても直そうとしませんでした。きっと苦しかったんだと思う。また、国家試験は戦後復活し、実技も行われました。実



写真15 病院実習風景

技では、窩洞形成があり、本学では足踏みエンジンを使用していたため、試験ではエンジン動力となる学生同伴で受験しました。私語は禁止だが心強かった。セメント充填の課題もあり、患者は近隣の東工大の学生に頼んでいました。」と伺いました。日本女子衛生短期大学になっても東工大との交流は続いたそうです。

戦後の混乱期に歯科医をめざすことが出来る境遇の女子学生が、診療時に足を出してこいでいる姿は格好が良いとは言いがたく、本人たちの苦痛は容易に想像ができ、印象に残ったと思われます。

■歯科大創立への夢

前出の山村こう先生は、「昭和23年頃私共同窓生は、何とかして大学に昇格させ、母校を残したく思いましたが、資力がなないので、大勢の力にて作りたいものと、東洋の卒業生

にも呼びかけて、遂に全国婦人歯科医会を結成しました。」同窓生にとって母校を失う事は重大事であり、継続を望み閉校を悲しむ記載が随所に見られます。新たな歯科大学開学を求める声が母校を失った同窓生からあがりました。

これについて、専門3回卒業の山田美穂先生は、「女子歯科大設立に就いては、焼け残った大岡山の学校へ両校の同窓会の役員が、清水先生を交えて、再三集合、協議を重ねたが、戦後の社会状況の下では、容易ならざる難事であり、実現は望めなかった。学校当局はもちろん、我ら同窓会も藁をもつかむ念いで、候補地の物色等に、努力を続けたのである。」と述べています。

また、神奈川歯科大学開学に際して基礎分野の教員派遣に尽力された早稲田大学 飯島小平名誉教授は、「当時の堀先生にとっては、大変に

苦しい時代で合ったに違いない。しかしこの雌状の時代にあっても、母校を失った、京城歯科や日本女子歯科の教え子たちの先生に対する深い思慮と愛情は一段と深まり、先生に対して母校再建を願う熱心な期待と応援が合ったらしい。先生もこうした期待に答えられて、失った母校の新しい再生の姿として不死鳥のように神奈川歯科大学の創立の実現を着々企画されていた。」と述べています。

■理事長の信念が通じる

戦後女子歯科医専の廃校が決まった後は、毎年1クラスづつ学生が減り、資産の貸し出しや切り売りで繋いでいました。女子歯科医専の最後の卒業生を送り出した後、歯科衛生士養成を目的とした歯科厚生学校を開学しましたが、第一回卒業生は少なく11名でした。当時歯科衛生士はほとんど認知されておらず、この11名は高校新卒者というよりは、知り合いの主婦など年齢層が高かったとお話を伺っています。翌年以降も24名、25名でした。まして1年制です。昭和29年、日本女子衛生短期大学になっても保健科別科併せて37名、翌年も36名でした。

保健科一回生の江口愛子さんは日本女子衛生短期大学創立10周年記念誌の中で「入学時は7名あまりでした。先生方、理事、来賓と学生数は同数と言った有様で入学式が挙行されたのでした。式の終わった後ひとりの理事はくつろいで話されたものです。「大学を創立するということは一通りな困難なことではないのです。7人の学生で学校を運営することは常識で考えて成立することではないでしょう。しかし理事長は本学への自信と希望を持たれていたのです。たくさんの先生方を7人の学生のためにお迎えすることは、一竿の絵桐タンスを嫁入り道具としてお祝いするようなものです。理事長はその信念で本学を経営されているのです。諸君もしっかり頑張ってみごとに嫁入り出来るようになって短期大学の基礎を築いて下さい。」と述べておられます(写真16)。この話は事実を良く物語っていると思います。学生数はその後増加に転じ、昭和31年度以降は、常時450名が学ぶようになりました(写真

17)。

しかし、6年制の歯科大学に比べると学生数は少なく、歯科大創設には厳しい環境にあったと思われます。23回生の後藤幹子先生は、歯科大学復興に努力をしていた堀先生について「確かに、私共の母校が廃止された時、誰が今日の神奈川歯科大学の立派な姿を想像出来たのでしょうか。敷地ですら当てもなく、もとより資金も戦後の凄まじいインフレで窮乏し万策尽き果て奥様に「刀折れ、矢も尽きたな」と、ふつと洩らされたとお聞き致しました。中略 政府払い下げの名古屋の軍施設跡地へ行かれたおりなど、ジャガイモを腰に、普通列車で名古屋まで立ち詰めで出かけられたり、横須賀の現在の所へ落ち着くまでは、只只学校用地を求めて、歩き続けられたとお聞きしています。

長い困窮と欠乏の中に、教えるに母校を、の御一念からすべてを抛って大学創立へと、ひたすらに幾多の努力を傾けて下さいました事を改めて深く感謝致さずには居れません。

■神奈川歯科大開設に反対が

少しづつ大学の方が軌道に乗り始めましても、まだ昼は大学のために東奔西走され、夜は生活のため、夜間開業をなさってやっと見え始めた希望の光に向かって最後の力を傾けていらっしやいました。あのいつも穏やかな慈顔の中に秘められた、不屈のご信念と、限りない包容力、朴訥と思えるほど飾り気のない誠実さ、あのお優しい先生のどこにあればほどの力強い推進力と実行力が保たれ続けられたのかと、超人的なご努力になんと申し上げたらよろしいか言葉がございません。私共日本女子歯科医専で教えを受けた者としては、小さな校舎の大岡山時代、病院も教室も本当に質素でしかも一時は廃校という絶望の中から学舎の灯を高く掲げて、一途にその目的に向かって走り続けて下さり、今では大学院、衛生短期大学、技工専門学校までの総てを含む立派な神奈川歯科大学として、大飛躍して頂きました事を心より感謝あるのみでございます。」と述べています(写真18)。

清水精一先生、堀武先生を歯科大学復興に駆り立てたのは本人たちの希望とともに、母校を失った女子歯科医専同窓生3000余名(歯科大

創立20周年記念誌より)、ひいては京城歯科大同窓生たちの、母校復興にかけられる強烈な思いだったのではないのでしょうか。開学までの苦勞に対して堀先生のご努力を讃え、大変に感謝されていることがよくわかります。

また、横須賀での開学において、神奈川県歯科医師会から猛反対が occurred。これには同窓会も協力して開学へ向け努力しました。尾崎ふじ江先生(指定20回)は、「それは神奈川歯科大学設立時の事で、神奈川県の歯科医師会の猛反対運動がありました。私も卒業生の一人として、神奈川県歯科医師会と日本女子歯科医専の同窓会との話し合いの席に出席させていただきましたが、それは神奈川歯科大学の横須賀出現をさらった激しい反対でした。

■戦後の荒波の中で復興

(中略) 誰が母校の大学昇格に、反対する者がいまいしょうや。いかに会からおこられても、日本女子歯科医専の会長・副会長とともに神奈川県歯科医師会の会長以下、役員方五十人位お宅を訪問し、母校の復興をお願いして歩きました。今と違い、代診のいない時期でしたので、いつも休診にして出かけました。

今思えば、すでに立派な大学は出来まし、何を犠牲にしたかそんなことより、大学の開校に優るものはありません。これ以上の嬉しい事はありません。大学発展・隆盛をひたすら念じまして筆をおきます。」同窓会がいかに母校復活を願い協力していたかが伝わってきます。

戦前から日本女子歯科医専を運営していた清水学長、堀病院長はこのように戦後の廃校、歯科衛生士教育への転換、清水先生は34年に逝去されましたが、39年神奈川歯科大学開学と、戦後の荒波に激しくもまれながらも歯科医専の母校を復興したのでした。

昭和39年、神奈川歯科大学開校を迎えます(写真19、20、21)。ここでも苦勞の痕が見られます。まず、昭和36年、日本歯科大学で事務局長を務めた木本鎮雄先生を日本女子衛生短期大学の理事長に迎えました。開学のための足固めです。

昭和37年に設立趣意書を提出し38年開学をめざしましたが却下されてしまいます。そのために、戦略的措置として(学校法人創立30周年



写真16 日本女子衛生短期大学第一回卒業生



写真17 日本女子衛生短期大学別科保健科。大岡山での最後の卒業式



写真18 堀先生の指導風景



写真 19 神奈川歯科大学開学式典



写真 20 日本女子衛生短期大学別科保健科。横須賀での最初の卒業式



写真 21 神奈川歯科大学第一回生入学生



写真 22 九州人会
堀先生ご自身が九州出身で、当時の京城大学（今のソウル）で教鞭をとった。京城では九州出身者が多かったようだ。また、九州の女子歯科医師希望者は、女子歯科医師が東京にしかないで、上京した（前述、藤井先生、後藤先生談）。文献2によれば、卒業生が国に戻り、その子が神奈川歯科大学に入学するケース、母子で女子歯科医師を卒業し神奈川歯科大学に孫と3代学んだ例もみられた。歯科医専時代から九州人会は行われていました。

記念誌 P7) 日本歯科大学の学長兼理事長・中原実先生が理事長に、榎垣麟三先生が学長に就任しました。堀先生が「学長は官でないだめだ」とおっしゃっていたとお話を伺った事があります。歯科医師会の動きを抑える目的もあったようです。開学を第一目標に、堀先生はあくまで黒子に徹したのでしょうか。

中原先生につきまして、エピソードがあります。同窓会では初代理事で日本女子歯科医専卒業生の鈴木鶴子先生を中心に、歯科大学に適した土地を東急の五島さんと相談するなど、母校復活に向けて鋭意努力されていました。

しかし開学式典で、中原先生は、神奈川歯科大学は日本女子歯科医専とは関係ない旨いわれたそうです。出席していた日本女子歯科医専の同窓生は、みんな涙ぐんだそうです。神奈川歯科大学は日本女子歯科医専そのものだという熱い思いが伝わってきます。

堀先生は、九州出身で（写真 22）、日本歯科医専を卒業され、東京高等歯科医学校（現東京医科歯科大）入局後、京城大学（ソウル、当時日本領）で教鞭をとられていました。その後帰国し、日本女子歯科医専に病院長として赴任されました。専門は保存学でとても優しく怒ったことはないそうです。

「日本女子歯科医学専門学校開学 70 年記念誌 懐風」には、堀先生の苦勞を讃える記載が多々見られ、学生・卒業生から厚い信頼を得ておられました。

神奈川歯科大学開学以降、新しい研究棟、実習棟などの建設が進められました（写真 23）。

残念乍ら、堀武先生は、昭和 53 年 5 月、心筋梗塞で急逝されました。ここに、故満子夫人が「懐風」に寄稿した俳句を紹介します。

『終わりの地になりし5月の浦曲かな
短夜の夢より淡き月日とも
歩み来し道なつかしや返り花
小春日や君の命の学園か』

堀武先生は日本女子歯科医専時代から学校法人神奈川歯科大学に至る 40 年の永きにわたり身を投じました。奥様からみればまさに堀武先生の命をかけた学園です。開学に尽力された銅像の 5 氏（写真 24）に報いるためにも 100 年後、本学が栄耀

栄華を極め、同窓生たちから尊敬の念を持って語られるような歴史を築いていく必要があります。

記念碑 (写真 25)

湘南短期大学第一校舎前に、昭和 55 年 日本女子歯科医学専門学校同窓会が建てた記念碑があります。

記念碑文は「日本女子歯科医学専門学校は、明治四十三年五月、我が国に於ける婦人歯科医師養成の嚆矢として創立され、以来運営隆昌、発展の一途を辿ったが、敗戦による専門学校廃止令の犠牲となって、昭和二十五年三月、遂に閉校の止むなきに至り、栄光に満ちた歯科医師養成の生涯を閉じた。しかしその伝統と精神は直ちに同年四月開校の日本女子歯科厚生学校に継承し、また昭和二十七年四月開校の日本女子衛生短期大学に継承され今日に至る。更に昭和三十一年四月、この地に新たに開学した神奈川歯科大学も以上歴史を背景として誕生した。我等は、この英姿に痛く満足し、同窓会一同相図り、ここに本短期大学、本歯科大学の創設に特に尽くした、清水精一・堀武・川村二郎・鈴木ツル・木本鎮雄以上 5 氏の功を改めて讃えるとともに栄耀に彩られた日本女子歯科医学専門学校の名を永久に記念せんとするものである。昭和五十五年十一月 日本女子歯科医学専門学校同窓会」です。

母校を失った時の同窓生の失意とその後の復興に寄与した方々の功績を讃え、歯科医専の伝統と精神は歯科大、短期大学に引き継がれているとしています。

今回の記事にあたり、専門 13 回卒 藤井晶子先生、昭和 24 年卒 後藤幹子先生、故堀武先生のご息女の堀美津子様にお話を伺い資料をお借りしました。また、昭和 25 年最後の卒業生の佐藤先生に卒業アルバムをお借りしました。

歯科医専卒業の先生方は、やはり母校を失ったときの悲しみと、神奈川歯科大学開学を母校復活として喜ばれたことが大変に印象的でした。本法人は、先人の努力により幾たびとなく襲いかかった危機を乗り越え歴史を繋いできました。100 年前からの同窓生 3000 人の母校でもあることを改めて実感しました。



神奈川歯科大学開校当初。旧教室実習棟がある



附属病院。目の前まで海



講堂完成、埋め立て進む



第一研究棟、教室棟完成、本部棟建設中



本部棟完成

写真 23 (上 5 枚) 校舎の変革

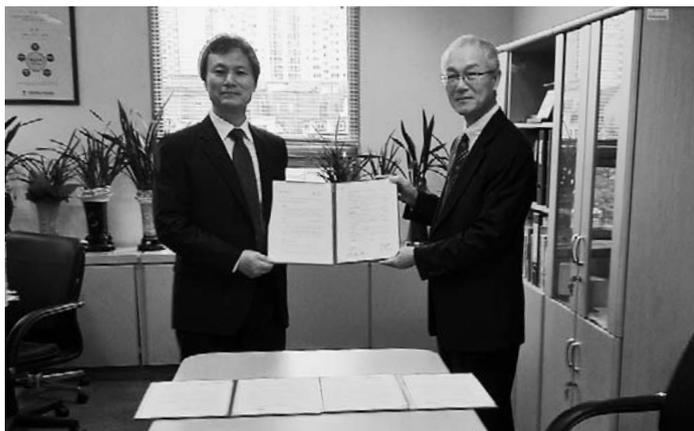


写真 24 銅像の先生方が一堂に介した写真。清水精一先生はすでに故人。昭和 42 年頃。左から川村、木本、榎垣、堀先生



写真 25 記念碑

高麗大学との単位互換提携協定に調印



神奈川歯科大学は、平成23年9月29日に韓国高麗大学（ソウル市）との間で単位互換提携協定に締結しました。

本協定は韓国の優秀な学生が、神奈川歯科大学で歯科医師への道を目指すことを可能にするもので、本協定の締結によ

り日本語能力が十分ではないが学力優秀な学生を対象として、高麗大学（生涯教育院）で神奈川歯科大学1年生としての単位と日本語能力を修得し、2年進級時に神奈川歯科大学に合流することが可能になりました。入学者は、韓国国家公認修

学能力評価試験結果の優秀者、現在大学在籍者、および大学卒業者を対象とします。

韓国の大学進学者は、国家公認修学能力評価試験を全員が受験するため、各大学の個別入学試験は行わず、成績優秀者から志望校に入学する厳格な制度が敷かれています。このため、国家公認修学能力評価試験日はすべての韓国企業は休日扱いで、事実上国家行事となっています。

韓国ソウル市の名門大学を総称してSKY大学と呼びます。Sはソウル大学で日本統治時代の京城帝国大学、Yは延世大学でアメリカ人によって設立されたキリスト教系大学を起源とする中、Kの高麗大は完全に韓国人によって設立された「民族

高大」のスローガンと共に知られる名門総合大学で、李明博現韓国大統領の出身校であり、医学部はあるが歯学部はありません。

本協定は、文科省への報告と承認を得たもので、文科省が推進するアジア圏における大学間人材交流の一翼を担うことが期待されています。

国内の4年生大学は18歳人口の減少が加速する中で、優秀な人材確保が大学の存続と品格を維持する最重要項目となっています。私立歯科大学もこの状況は同様です。本協定が神奈川歯科大学にとって、世界各国に優秀な人材輩出と科学技術の世界発信により社会貢献していく礎になるものと考えています。

大連市口腔医院建院60周年式典参加報告



本学と中国遼寧省の大連にある大連大学とは姉妹校である。

付属の大連市口腔医院は所謂院内生の臨床教育機関と歯科一般の診療、隣接医学の診療を行っている市の中心部にある歯科病院である。中華人民共和国建国63年であるから、現在の中国の体制になってすぐに設立されたことになり、歴史は古い。

現在、本学には客員教授が5名おり、外国人留学生も訪日

中である。他の姉妹校情報は詳しくないが交流は順調にすすんでいるのではないだろうか？今後近隣アジア諸国との関係が強くなることも望まれるところである。

その大連市口腔医院の60周年記念式典が去る2011年9月28日に開催された。招待状が郵送され、本学から学長始め4名が出席した。

27日早朝に成田を出て29日には帰国するといういつものハードスケジュールであった。

昼に大連に到着し、口腔医院に向かうとその日は記念の学術講演会であった。病院幹部に挨拶と簡単な会議に後で佐藤学長と笹倉先生の記念講演があった。両者共に中国各地からの病院長レベルの講演のラストバッターとしての出番である。二つの会場で熱気溢れる討議が交わされた。自分も経験があるが中国では講演後は必ず質問が出る。夜は市内の漁港製造酒店というレストランで各部署に別れての宴会であったが、病院長他は持ち回りで大変そうであった。

翌28日が記念式典である。9時30分から病院の六楼学術庁で行われた。音楽が響き、煙が出で、紙吹雪が舞い、司会はテレビ局のアナウンサーといった派手な演出に驚いたが、主目的は先人への感謝の式典であった。

大連の前病院長や本学代表として佐藤学長も壇上で感謝状を受けた。交流に尽力してき

た介があったと感じた時間でもあった。

その後、12時より大連国際金融会議中心に場所を移して式典午宴が開かれた。中国各地の歯科関係者や大学、衛生局等の公的立場の多くの招待者で賑々しく行われた。学長は矯正科主催の講演会、我々は大連大学訪問が予定されていたので控えめに宴に臨席していたが、それでも乾杯の攻撃をかわす事は無理であった。午後の日程が予定通り実行されたのは幸いであった。

夜は夜で再び場所を移して式典が終了となる宴会が催された。我々も最後のスケジュールなので心置きなく中華料理とお酒を楽しんだ。それでお開きになる筈であったが、途中で矯正科スタッフから2次会の用意があると告げられた。郷に入れば郷に従えとばかりにありがたく参加させて貰うことにして、大連の夜は更けていった。

(特任教授 荒川秀樹)

教学部便り

神奈川歯科大学 後期の学生生活について



歯科大教学部学生担当部長
山田良広

全国歯科学学生総合体育大会(デンタル)は日本歯科大生命歯学部学の事務主管のもと、本学が弓道と卓球で部門主管を務め、真夏の暑い盛り学生諸君は優秀な成績をおさめました。東日本大震災の被災により岩手医大歯学部と奥羽大歯学部が合同で参加するなど従来成績に応じた順位付けは

なかったものの、かなり上位の成績であったと思われます。

師走に入りデンタルは早くも第44回大会の冬季部門が鹿児島大歯学部事務主管のもと開始される時期となりました。

6年生は現在学士試験の最中で、2月上旬には歯科医師国家試験、他の学年も年明け1月中旬から後期本試験があります。

年末年始の過ごし方が試験に大きく影響しますので、勉強と遊びにメリハリをつけることが大切です。また、インフルエンザの蔓延する時期でもあるので体調管理にも十分な注意が必要です。

大学の正月は4月です。笑って新春が迎えられるよう、学生諸君の今いっそうの奮起を期待します。

短期大学 受講態度の改善に向けて



湘南短期大学教学部学生担当部長
林田丞太

学生は、学年が進むにつれて目的意識が高まり、講義での受講態度や実習に取り組む姿勢が良くなってきます。

しかし、1年生においては前期から後期に進むと逆の傾向がみられます。希望に胸ふくらませ入学し、高校とは違う講義形態や初めて経験する実習など緊張感の中で前期を過ごします。

しかし、夏休を終えた後期になると大学生活や講義にも慣れ、自ずと受講態度にゆるみが生じてきます。

そこで本学では、他大学では行われていない〈起立・礼〉という講義前後の挨拶や黒板の掃除を学年を問わず教育の一環として始めました。

直ちに受講態度へ反映されるものではありませんが、けじめをつけ、教わる者としてあるべき真摯な姿勢を心がけてもらうためです。講義中に携帯電話でメールを送る学生、iPodで音楽を聴く学生、彼らの受講態度が改善していくよう遠慮せずに取り組んで参りたいと考えております。

このような取り組みをご父母の皆様にもご理解いただき、より良い環境での学習へ向け、ご協力をお願い致します。

平成 23 年度戴帽式



9月22日、平成23年度戴帽式が、研修先医療機関の先生方のご列席を賜り、保護者の見守る中、本学大講堂にて看護

学科、歯科衛生学科合同で行われました。

戴帽生は看護学科1年生と歯科衛生学科2年生です。式典は、戴帽の儀と聖火伝達の儀が行われました。

戴帽の儀は看護帽を戴く式であり、この帽子は「愛」や「責任」の象徴で、医療人としての精神を表します。聖火伝達の儀は、ナイチンゲールが1854～56年のクリミア戦争で従軍した野戦病院で、ランプに灯を

ともして夜回りを欠かさず看護をしたことに由来し、ナイチンゲールに続く人を表します。

式典は滞りなく行われ、戴帽生の一条乱れぬ動きから、これから始まる臨床実習を前に、医療人としての責任と決意が伝わってきました。

この式典の意義を胸に臨床で学び、将来は建学の精神である愛に満ちた看護師、歯科衛生士として社会に貢献することを期待します。

口腔医学シンポジウム開催のお知らせ

戦略的大学連携事業の一環として、口腔医学シンポジウムが開催されます。参加費無料ですので、ぜひご参加下さい。

内容：口腔の病気と全身の健康～口腔医学の展開～

日時：2012年1月22日(日)
13:00～17:30

場所：鶴見大学会館 地下1階メインホール

申込：電話 092-801-0411

メール kikaku@college.fdcnet.ac.jp (福岡歯科

大学)

戦略的大学連携事業…神奈川歯科大学は平成20年度より福岡歯科大学を代表校とした連携事業(連携大学名：九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、鶴見大学、福岡大学)に参加しております。



横浜市立金沢中学校の生徒が職業体験に来校



将来への夢を持ち、今後の進路学習に大きな目的を持つという意味で、中学校において、職業体験実習（職場体験ともいう）が実施されています。

文部科学省のデータによると、現在、全国の公立中学校の約90パーセントの学校が、職業体験を実施しており、ほとんどの学校では、教育課程上、特別活動、総合的な学習の時間に位置付けて実施しているといえます。

湘南短期大学でも、毎年、横浜市立金沢中学校の生徒（2年生が対象）の職業体験の受け

入れをしており、今年で6年目を迎えました。

暮秋小雨の中、平成23年11月11日（金）、将来、歯科衛生士、または、看護師を夢見る生徒、20名が来校しました。

短大での職業体験とは

職業体験の内容は、将来の職業の選択肢を踏まえて、歯科衛生士や、看護師とは、どのような職業なのかを知ることから始まります。

スライドで説明する先生に、質問しながら、メモをとる生徒もたくさんみられました。

具体的な内容は、下記の通りです。

・歯科衛生学科（担当：藤野先生・中向井先生）

- 1) ムシ歯のできはじめ
- 2) 歯の型をとってみよう
- 3) 実習室見学

・看護学科（担当：鈴木先生・菅谷先生）

- 1) 静脈採血の講義を聴講
- 2) 実習室見学
- 3) 看護師の仕事について、質疑応答

引率で来られた中学校の先生に聞くと、生徒が体験先を選択する際は、一つの事業所あたり、多くて3～4名だそうです。湘南短期大学へは、毎年20名の希望者があり、超人気選択肢であり、倍率が高いと話をしておりました。

また、担当していただいた先生からも、「中学生が皆いきいきと授業体験と『仕事の案内』を聞いてくださりまして、こちらも勉強になりました。ありがとうございました。」とコメントいただきました。

終了後、中学生を正門まで見

送ったとき、「今日は、とても良い勉強になりました。絶対、この職業に就きたいと思います!」と、弾んだ声で、話をしてくれたのが印象的でした。

この生徒たちが、近い将来、本学の学生として入学してくれることを、切に希望すると同時に、来年以降もこの職業体験実習を通して、本学が地域に根ざした大学として貢献していける事を願う次第であります。

最後に、お忙しい中、担当していただきました、歯科衛生学科、看護学科の諸先生方に、この場をお借りして、御礼申し上げます。

（神奈川歯科大学 体育学 川上正人）



第6回神奈川歯科大学白菊会総会及び懇親会



平成23年10月1日に、神奈川歯科大学白菊会第6回総会並びに懇親会が執り行われました。

式典には、ご遺族様13名・会員様73名・ご来賓2名・教職員18名・解剖実習該当年の2年生全員約112名が参列する中、午前10時30分に開催されました。冒頭、本学にご献体賜りました1,747柱の御霊に黙祷を捧げ、そのご冥福をお祈りいたしました。

白菊会役員今村幸一様の開式の言葉に続き、本学を代表し

て佐藤学長より本学の現状、解剖学教育の重要性、それを支える白菊会会員様への感謝の言葉が述べられました。次に高橋解剖学教授より、解剖学教育を授ける立場から現在行われている解剖学実習と、研究内容についてのご説明がございました。続いて、本年解剖学実習を終えた歯学部2年生住吉美咲さんと、遠山俊之助さんから、また、昨年解剖実習を終えた歯学部3年生の鈴木志帆さんと西村隆克さんからその体験を語ってもらいました。

次に、本年度解剖実習にご献体賜りました3名のご遺族様より「献体への遺族の想い」と題し、学生達に向けてお話を賜りました。ご遺族様にとりましては、最愛のご肉親を亡くされた際の悲しみを改めて思い出すことに

も繋がり、大変なご無理をお願いいたしました。「学生さんの教育に少しでも役に立つのなら」と、お引受け下さいました。

学生達は、ご遺族様から心温まる励ましのお言葉を頂き、ご献体の意味を十分に理解し、改めて人間の善意、生命の尊厳や倫理感といったものを感じてくれたものと思います。

この後10分間の休憩をはさみ、新潟大学白菊会理事長の熊木克治先生より「科学の目・心の目を育てる」と題した講話を賜りました。会員様や学生にとりましても有意義かつとても勉強になったことと思います。続いて、文部大臣からの感謝状をご献体賜り総会にご臨席賜りましたご遺族様4組に佐藤学長から手渡されました。

15分間の準備の後、窪田展

久附属病院臨床教授のご挨拶、峯村明彦法人事務局長による献杯発声の後、懇親会が執り行われました。親しく和やかな雰囲気の中、会員様にとりましてもまた若い学生達にとりましても、同じ食卓を囲んでの談笑は大いに意義あるものであったと感じます。今回は佐藤学長はじめ教授の先生方も共に食事に加わり、更に有意義な一時を過ごせたことと思います。時は瞬間に過ぎ、事務局からの連絡事項、TV放送されたビデオを供覧し、午後1時30分、中村安郎役員の閉会の言葉を持って、第6回白菊会総会は無事終了いたしました。



平成 23 年度 神奈川歯科大学 墓前祭 納骨式



人体解剖実習の為にご献体され、本学墓地に埋葬される方々の納骨が、平成 23 年 10 月 5 日 (水) 14 時より、横須賀市佐原 宝泉山常勝寺におい

てご遺族様 8 名、本学からは、平田副学長、高橋教授、人体構造学教室員及び大学事務職員 7 名、解剖実習を学んだ 2 年生 115 名の合計 124 名が参列

し厳かに執り行われました。

本年度の納骨は 12 柱、これまで本学にご献体頂き、本学墓地に納骨させていただいた方々は 542 柱にのぼります。

本年度の墓前祭・納骨式は、あいにくの空模様となり、時折激しく降る雨の中で、例年通りの次第から一部変更を余儀なくされ、納骨堂前での線香は省くことを急遽決定致し、定刻の 14 時、白菊会勝野の進行で式典は開式となりました。常勝寺椎名副住職の読経の中、ご遺族様・教職員全員と、学生 115 名が焼香をし、故人のご冥福を祈るとともに感謝の念をとなえました。

ご住職退席の後、本学を代表して高橋常男解剖学教授から故人への追悼の言葉とご遺族様への深い感謝の言葉が述べられ、式典は閉式となりました。

その後、ご遺骨を抱いた学生 13 名を先頭にご遺族様と教職員が続き、本堂より石塔に移り、学生の手で納骨堂に納めました。墓前では、線香は焚かず、参列者全員による合掌をもって最期のお別れをいたしました。

雨中での開催となり、御高齢のご遺族様の足元を大変気にかけておりましたが無事、滞りなく執り行うことができました。

2011 稲岡祭 ~希望~

10 月 8 日 (土)・9 日 (日) に、毎年恒例の「稲岡祭」が開かれました。今年のテーマは「希望」で、天候にも恵まれ、各クラブ・サークル・ゼミから沢山の出店があり、賑やかでした。

3 月 11 日の東日本大震災後に本学でも被災者支援プロジェクトを立ち上げ、被災地への支援を行っていますが、実際に現地で活動していたボランティアがチームとなり「気仙沼 ボランティアネットワー

ク」が生まれ、気仙沼の復興のために現地の方がひとつひとつ手作りしたミサンガの販売もされました。

「無料歯科相談」では本学の歯科医師、歯科衛生士が、歯についての相談会開催し、一般の方からのご相談に対応しました。また、「進学相談会」では神奈川歯科大学と湘南短期大学が同時開催し、本学を目指す高校生が、受験対策等について熱心に相談をしていました。



10 月 8 日 (土) の「中川翔子ライブ」は早々に予約を打ち切るほど盛況で、9 日 (日) の「ガレッジセール」「カラテ

カ」「ポテト少年団」のお笑いライブも、学生から近隣のご家族連れまで大勢の方が訪れ、楽しんでいました。

平成 23 年度 神奈川歯科大学大学院 歯学研究科FD (Faculty Development) ワークショップ



歯学部ワークショップは今までも実施してまいりましたが、大学院教員の教育能力を高めるために、授業改革の組織的な取り組み方法として、11 月 23 日 (水) 文部科学省の「第 2 次大学院教育振興施策要綱」をもとに、大学院指導教授・指導教員・指導補助教員を対象に、大学院教育者の指導能力開発をテーマに、新しい大学院カリキュラムの指導計画を策定するワークショップを行いました。

今年度から本学大学院では translational research を掲げ、学際的な融合により基礎と臨床の障壁を取り除き、応用科学の進歩を促進する可能性として、本学の特徴と今後の可能性について、実りあるワークショップとなりました。

テーマ：大学院教育者の指導能力開発
場所：神奈川歯科大学 教室棟